

ジ
ャ
ン
ゴ

花村萬月



ジ
ャ
ン
ゴ

花村萬月

DJANGO

Hanamura Mangetsu

KADOKAWA-SHOTEN

ジャンゴ

1995年 6 月30日 初版発行

著 者／花村萬月

発行者／角川歴彦

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102 振替 00130-9-195208

TEL 営業03-3817-8521 編集03-3817-8461

印刷所／暁印刷株式会社

製本所／株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
©Printed in Japan 定価はカバーに明記してあります。

ISBN4-04-872865-2 C0093

ジャンゴ

目次

第一章	地下室の光景	5
第二章	ジャンゴの誕生	57
第三章	麗子の場合	71
第四章	水ようかとプラボトル	115
第五章	旅立ち	149
第六章	麗子と亜矢子	185
第七章	自殺者の群	237
終章	フォービートの死	283

Art Direction

Takahashi Masayuki

Photograph

Ishiee Hiroyuki

Special Thanks

CLUB Que

Taki Kazuyoshi

第一章

地下室の光景

血まみれの指

リボルバーである。撃鉄に指を挟みこんでしまえば、弾はでない。それは知っていた。充分承知していた。隙を見て、それができそうな状況でもあった。

構えているのは、山城の使い走りをしているチンピラだ。ダブルアクションのリボルバーのハンマーを起こして、西部のガンマン気取りだ。

左手で手首を捻^{ひね}りあげ、右手で銃全体を覆いこむようにして、撃鉄に指を挟みこむ。

アメリカで暮らしていたとき、P F I Cを終了したインストラクターが一般人に射撃及び護身術を教えているサークルで、撃鉄に指を挟みこむ方法を習った。相手は隙だらけのチンピラ。そう難しいことではない。

しかし、それをして、どうなる？ という諦^{あきら}めもあった。コンクリートで固めた地下の密室に、五人。銃を発射不能にしても、けっきょくは取り押さえられてしまうだろう。

沢村は、そう自分を納得させた。

こめかみに押しつけられた銃口は、沢村自身の体温ですっかり温まっていた。押しつけられたときの氷のように冷たい無機的な感触は消え、銃口とこめかみが一体化してしまったかのような錯覚さえおきた。

手入れの行き届いたりボルバーだった。青黒く底光りした。火薬の匂いと機械油の匂いがした。沢村は自分を呪った。自分の臆病さを呪った。

脳裏には、敢然と立ちあがり、撃鉄に指を挟みこんで銃を奪い取る自分の姿があった。

銃を奪い取ってしまったえば、状況は大きく変わるだろう。沢村は山城たちに銃をつきつける。山城は手をあげて、こんどは沢村に命乞いする。

そこまではいい。しかし、その空想には続きがあった。撃鉄に挟みこんだ指は、血まみれであった。

当然のことである。モデルガンとちがって本物の銃である。ハンマーノーズは猛禽類の嘴くちばしのように尖っている。実包の雷管を衝いて撃発させるのだから、当然のことだ。

射手が撃とうとして引き金を引けば、そこに挟みこんだ指はハンマーノーズの直撃を受ける。

当然、肉が裂け、爪が剥がれ、骨が露出するだろう。

沢村は、それが恐ろしかった。

命が危ないというときに、指一本潰つぶすことをためらっていた。鋭いハンマーノーズが指の肉を裂くことを恐怖した。

「貞操は高くつくんだよ。ましてや、おまえは妹にとんでもないものを教えこんだ」

山城がいつもの抑揚を欠いた声で呟いた。

「おとしまえ、どうつける？」

そう問われても、なにも言えない。沢村は嵌められたのだ。とんでもないものを教えこんだのは、別の男だ。背後に麗子に入れ知恵した男がいるのだ。

しかし、口をひらいて釈明すれば、山城は言葉尻をとらえて、ねちねち絡んでくるだけだ。こうなる前から、幾度も釈明した。おきたことを全て、そのまま山城に語った。

しかし山城はそれをまったく信じようとはしない。麗子の背後に巧妙に隠れている男さえわかれば……。

背中を汗が伝い落ちていく。何とかしなくては……沢村は焦った。

唇が歪んだ。歪んだ結果あらわれたのは、迎合の笑いであった。愛想笑いであった。追従の卑しい笑顔だった。

銃を構えているチンピラが舌打ちした。

「兄貴……撃っちまうていいですか？」

山城は肩をすくめた。

「兄貴。撃たしてくださいよ。この野郎、見苦しい。きんたま、腐りきってやがる」

チンピラは苛立ちをはじめていた。部屋のいちばん隅で腕組みして成り行きを見ていた芦原も、やりきれなくなった。

ステージでは、あれほどクールなギターを弾く男が、銃をこめかみに押しあてられたとたんに、このざまだ。いや、逆にアメリカ帰りだから、銃のほんとうの恐ろしさを知っているのかもしれない。

ともあれ、この状況では、沢村はいたぶられ、翻^{なま}られて殺されるのは時間の問題だ。状況を好転させることはできないかもしれないが、なんとか時間を稼げないか。芦原は思いきって山城に声をかけた。

「どうです？ 麗子さんにも立ち会っていただいたら」

「なぜ？」

「なぜって、当事者どうし……」

「女は受け身だからね」

「そりゃあ、そうですけど、ひとりではできませんから」

「俺はフェミニストなんだよ」

芦原は口を噤^{つぶ}んだ。山城の視線から、ぎこちなく顔をそむけた。山城は顎の先を弄び、独白した。

「御対面といくか」

麗子

階上から電線をひっぱって、店舗ディスプレイ用の強力なリフレクター・ランプを点灯させている。ランプの周囲から陽炎が立ち昇るほどに眩く熱い光だ。

麗子が小首をかしげると、耳のピアスがリフレクター・ランプの光を反射して、金色に輝いた。金色の光は沢村の瞳を射抜いた。沢村は下唇を噛んでうつむいた。

湿気のひどい黴臭いコンクリートの地下室で、抜けるように肌の白い麗子は場違いだった。流行とは無関係の、下半身に密着したスリムのフレンチ・ジーンズに柔らかな黒革のパンツを履いていた。純白のシルクのブラウスは襟元まできちっとボタンがはめられている。

「なに？」

尖った顎をしゃくって、山城に迫る。あれほど恐れられている山城だが、麗子に対しては、甘い。山城とは思えないような科白を吐く。

「最愛のおまえにつまらないものを教えこんだあげく、貞操を奪った男の死に様を見せてやろうと思っただけ」

「勘違いしてない？ あれを教えこんだことはともかく、男と女の関係は、沢村とわたしの合意のうえよ」

銃を突きつけているチンピラが、しらけた顔をした。

「だいたい、貞操なんて、とうの昔になくしてるもの」

麗子は山城を嘲笑う。山城を挑発する。おもむろに沢村を向く。親指の爪を噛み、笑いを含んだ声で言う。

「わたしたちのあいだにあったのは、純粹な愛よね」

麗子の口調には山城に、そして沢村に対する皮肉と悪意があふれていた。この場にあるすべてに対して憎しみを抱いている気配があった。

スピード

麗子が山城の妹であることは知っていた。この赤坂界限で、多少なりとも陰の部分に噛んでい
る者ならば当然承知していることであつた。

だから店でギターを弾いている自分に麗子の熱い視線が注がれていることを実感した沢村は、
麗子を見視した。麗子の視線に気づかぬ振りをした。

春めいた夜だった。唐突に空気が和らいだような、そんな夜だった。

その日の演奏を終え、愛機ギブソンES-335をギターケースにしまおうとしていたときだ。
楽屋のドアがノックされた。

バンドのメンバーたちは麗子の姿を見ると、曖昧な笑顔をうかべて、逃げだすように楽屋をあとにした。

沢村は逃げだすわけにかなかった。なにしろ麗子の目的は沢村であり、ここで適当な言い訳でもして麗子の機嫌を損ねることは、いまの仕事を棄てることでもあった。

山城興業、つまり山城の経営するこの超高級クラブでのハコの仕事は、他での演奏の倍ちかい収入を保証していた。

しかも山城は、他に音楽事務所や芸能プロダクションを幾つか経営しているだけあって、じつにジャズに詳しい男で、沢村の演奏を理解し、客の陳腐なリクエストに応えるといった最低限の妥協はしなければならぬものの、かなり自由な演奏を許していた。

『アンサンブルがしっかりしてきたわ。過剰な自己主張がなくて、すぐに耳に馴染む。でも、しばらく耳を澄ましていると、切ないものがあるわ。……どこか知らない土地を旅しているような……孤独な流れ者になったような気分になる』

麗子はいきなり沢村のバンドと沢村の演奏に対する評価を口にした。続けて、自分が幼い頃からピアノを習い、音大のピアノ科を出ていることを手短かに語った。沢村と一度セッションしてみたいとも言った。

『テクニクは……あなたたちプロと較べることはできないけれど、ラフマニノフのピアノコンチェルトの二番をそれなりに弾くことができる程度ではあるわ』

ラフマニノフをそれなりに弾けるということは、かなりのテクニクである。沢村は麗子の口

調から、彼女が演奏にかなりの自信をもっていることを悟った。

『せっかくですが、俺のギターなど独学の、ごく低次元のものです。セッションは勘弁してください。恥はかきたくはありません』

『そうかしら。わたしは譜面に書かれた曲はそのとおり演奏できるけれど、即興はひどくぎこちない。沢村さんのように自由に音を操ることはできないの』

『クラシック音楽と、ジャズでは成り立ちがちがいますから』

『とにかく、わたしの技術レベルだと、譜面に書かれたことをとりあえず忠実に再現するだけのロボットみたいなものね。息が詰まるの。自由がないわ』

『それは譜面に書かれたクラシック音楽が往々にして高度なものであり、作曲者の意図した音を再現するだけでも演奏者の全精力を要求するからです。しかたありませんよ』

麗子はまっすぐ沢村を見つめた。沢村の心が軋きむように揺れた。かろうじて昂たかぶる気持ちを押し隠した。

『ジャズは、モードなども使いますが、極端に複雑なことはしていません。クラシックほど複雑ではない。技巧も不要です』

『そうかしら』

『ええ。やはり基本はブルースですから、シンプルです。クラシックのような超絶技巧は要求しません。だから、そのぶん、余裕があります』

『その余裕を、即興に振り向けるのね？』